

エデンの秘密

ベレーシート

●今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」のテーマは「エデンの秘密」です。なぜこのテーマかと言えば、イエシュアが宣べ伝えた「御国の福音」と密接にかかわっているように思うからです。このつながりを見出すことは、神のご計画の全貌を知る上でこの上なく重要です。私は現在「教会がユダヤ的ルーツとつながり合わせることで回復し完成する」ということを検証するために、マタイの福音書をギリシア語からヘブル語に戻して解釈(ミドゥラーシュ)しようと試みています。また神田満牧師もマルコの福音書に使われているヘブル語を取り出し、「初回言及の法則」にしたがって語彙の本来の意味をさぐりつつ、御国の福音の真意を解釈しようとしています。まだ二人ともそれぞれの福音書の始まりの部分の取り組みでしかありませんが、これまで分かって来たこととして、「エデン」にまつわる情報がきわめて重要だということです。

●イザヤ書 46 章 10 節に「わたしは、**終わりの**事を**初め**から告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごととは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う」とあります。ここで「**終わり**」(「アハリート」 אַחֲרִית)とは、神のご計画が成し遂げられる最終ステージのことです。ここで驚かされるのは、神のご計画の最後に起こる出来事が、「**初め**(「レーシート」 רֵאשִׁית)から告げられている」ということです。とすれば、私たちは聖書の最初を特に注意深く読み直さなければなりません。そして神のご計画の全貌とその整合性を悟らなければならないのです。そこで今回は、創世記 2~3 章の「エデンの園」について書かれている箇所から、とりわけ 2 章の「エデンの秘密」について学んでみたいと思いますが、これは今後も書き足していく私なりのひとつのノートと考えていただければと思います。

●創世記 2 章全体を 4 つの部分に分けて、その一つひとつを取り上げて学んでいこうと思います。

1. 人間の創造・・・・・・・・・・・・・・・・ 4~7 節
2. エデンの園に置かれた人、および木と川・・・ 8~14 節
3. エデンの園における人間の務め・・・・・・・・ 15~17 節
4. ふさわしい助け手との一体・・・・・・・・ 18~25 節

1. 人間の創造

【新改訳 2017】創世記 2 章 4~5 節

2:4・・・神である【主】(יְהוָה אֱלֹהִים)が、地と天を造られた(עָשָׂה)ときのこと。

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えて(צָמַח)いなかった。神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す(עָבַד)人もまだいなかった。

●創世記 1 章では「**天と地**」となっていて、天にあるものについても記されていますが、創世記 2 章では「**地と天**」となっており、天に関する記述がありません。もっぱら「地」に関するだけです。「大地」の「アダーマー」(אֲדָמָה)と「人」の「アダム」(אָדָם)は語呂合わせとなっています。また、創世記 1 章は「**神**」(「エローヒーム」אֱלֹהִים)であるのに対し、創世記 2 章では「**神である主**」(「アドナイ・エローヒーム」יְהוָה אֱלֹהִים)となっています。

●さらに、創造の動詞も創世記 1 章では「**バーラー**」(בָּרָא)となっているのに対し、2 章では「**アーサー**」(עָשָׂה)という動詞(不定詞)が使われています。創造の順序も創世記 1 章では植物が人間よりも先に造られたのに対し、創世記 2 章では植物よりも人間が先に創造されています。一見、まるでさかさまのように見えます。そもそも 1 章と 2 章では資料が異なるという見解がありますが、創造の視点が異なっているだけです。ですからその視点の違いを矛盾と見るのではなく、相補的・補完的・重層的に見なければなりません。イエシュアもパリサイ人からの離婚に関する質問に対して、創世記 1 章の「創造者は、初めから人を男と女に造って」と語り、続いて創世記 2 章の「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ばれ、ふたりの者が一心同体になるのだ」と言って、「人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません」と答えています(マタイ 19:4~6)。つまり、イエシュアは創世記 1 章と 2 章を一つに結びつけて語っておられるのです。

●創世記 2 章 5 節の時点では、普通の実のなる「木」(「エーツ」עֵץ)ではなく、みずぼらしい灌木(低木)である「スイーアツハ」(שִׁיחַ)が用いられています。その理由は、「神である主」が地の上に雨を降らせていなかったからということと、まだ大地を耕す人間が造られていなかったからです。しかし人が造られることで、**野**(「サーデ」שָׂדֶה)は「**麦畑**」となり、イエシュアの弟子たちは安息日に「麦畑の穂を摘んで始めています」(マタイ 12:1、マルコ 2:23)。またイエシュアは御国のことを「**畑**(「サーデ」שָׂדֶה)に隠された宝のようなもの」とたとえています。

●2 章 6 節には、人間の創造が「木」と「水」と密接な関係があることを示唆しています。

2:6 ただ、豊かな水(אֵד)が地から湧き上がり(עָלָה)、大地の全面を(אֶת-כָּל-פְּנֵי-הָאָדָמָה)潤していた(שָׂקָה)。

●「エード」(אֵד)という語は、この箇所とヨブ記 36 章 27 節の 2 回しか使われていません。口語訳と七十人訳が「**泉**」と訳し、新改訳、新共同訳、フランシスコ会訳が「**水**」、岩波訳が「**地下水**」と訳していますが、新改訳 2017 では「**豊かな水**」と訳しています。それは、地から湧き上がる水が大地の全面を潤すほどのものであったからだと推察します。他にも「水蒸気」とか「霧」といった意味があります。

●この「豊かな水」(単数)が地から「**湧き上がり**」と訳された言葉は「**アーラー**」(עָלָה)です。これはイエシュアに係る重要な語彙です。イエシュアはしばしば山に登られましたが、その行為は預言的です。ヘブル語の「アーラー」(עָלָה)は、単に「登る、上る」を意味するだけでなく、「(いけにえを)ささげる」とか「反芻する」といった意味があります。「反芻する」動物はきよい動物であり、全焼のいけにえや罪

のいけにえとして祭壇にささげられる牛や羊です。つまり、イエシュアが「山に登る」という行為は、やがて聖なる山エルサレムにおいて神にささげられる神の小羊イエシュアが、地にあるすべてのものに、渴くことのないいのちの水を注ぐというイメージを暗示させます。このことは創世記 2 章 10 節でも再び取り上げます。その間に、人間の創造が挿入されています。

2:7 神である【主】は、その大地のちり(עָפָר)で人を形造り(יָצַח)、その鼻にいのちの息を吹き込まれた(נָפַח)。それで人は生きるもの(נֶפֶשׁ חַיָּה)となった。

●「いのちの息」(「ニシュマツト・ハツイーム」נְשֻׁמַת חַיִּים)。聖書でここにしか出てこない語彙です。「息」のことを「ネシャマー」(נְשָׁמָה)と言い、その連語形が「ニシュマツト」(נְשֻׁמַת)となります。「ニシュマツト」が単数形であるのに対し、「いのち」が複数形となっているのは、「エローヒーム」と同じように、畏敬を表わすものと言えます。

●ヘブル語で神の「息」のことを一般的に「ルーアツハ」(רוּחַ)と言いますが、以下の箇所を見るなら、「ネシャマー」(נְשָׁמָה)と「ルーアツハ」(רוּחַ)とは同義だと理解できます。ちなみにそれぞれの使用頻度は、「ルーアツハ」が 389 回であるのに対し、「ネシャマー」はわずか 24 回です。以下のヨブ記の例から、「ネシャマー」と「ルーアツハ」が同義的パラレリズムであることが分かります。

ヨブ記 4 章 9 節「彼らは神の息吹(נְשָׁמָה)によって滅び、御怒りの息(רוּחַ)によって消え失せる。」(新改訳 2017)
 同 27 章 3 節「私の息(נְשָׁמָה)が私のうちにあり、神の霊(רוּחַ)が私の鼻にあるかぎり、・・」(同)
 同 32 章 8 節「確かに、人の中には霊(רוּחַ)があり、全能者の息(נְשָׁמָה)が人に悟りを与える。」(同)
 および同 33:4、34:14。イザヤ 42:5、57:16 を参照のこと。

●「生きるもの」=「生ける魂」(「ネフェシュ・ハツヤー」נֶפֶשׁ חַיָּה)。この表現は人間だけでなく、創世記 1 章 30 節にあるように、**生きるいのちのあるすべてのもの**に対しても使われています。ですから「ネフェシュ・ハツヤー」を「生ける魂」ではなく「**生きた被造物**」と訳す人もいます。

●2 章における人間の創造の特徴は、神が人の「鼻(複数)にいのちの息を吹き入れた」ことにあります。そのことが他の被造物との大きな違いです。七十人訳は鼻ではなく「その顔にいのちの息を吹きかけた」と訳しています。鼻であっても顔であっても、いずれにしても神と人が顔を向かい合っていることには変わりありません。これは 2 章後半で、人と、それに「向かい合う者としての助け手」(「エーゼル・ケネグドー」עֶזְרַת כְּנֻגְדוֹ)とのかかわりの型となっています。

●神である主が人の鼻にいのちの息を「吹き込む」ことで人は生きるものとなったのですが、この「**吹き込む**」の「ナーファハ」(נָפַח)が、同じくいのちと関係して用いられている箇所にエゼキエル書 37 章 9 節があります。それは終わりの日、全イスラエルが回復するためになされる神の奥義であり、驚くべき神の恩寵的行為です。

【新改訳 2017】エゼキエル書 37 章 9 節

そのとき、主は言われた。「息に預言せよ。人の子よ、預言してその息に言え。『【神】である主はこう言われる。息よ、四方から吹いて来い。この殺された者たちに**吹きつけて**、彼らを生き返らせよ。』」

●創世記 1 章と 2 章で異なる点は、1 章では人を「**ご自身のかたち**」(「ベツアルモー・ベツエルム」**בְּצַלְמוֹ בְּצַלְמִי**)として創造し、**男**(「ザーハール」**זָכָר**)と**女**(「ネケーヴァー」**נְקִיבָה**)に彼らを創造したのに対し、2 章では人の鼻に「いのちの息を吹き込むこと」で生きるものとさせたことです。ちなみに「男」を意味する「ザーハール」の動詞「ザーハル」(**זָכַר**)は「心に留める、記憶する」という意味ですが、これは神の関心と興味を含む存在という意味と考えられます。

●また、人間は大地の「**ちり**」(「アーファール」**אֶפְרָא**)という物質で造られています。その「ちり」で造られた人間に神である主がいのちの息を吹きかけられたことで、人間は生きるものとなったのです。同じ「ちり」でも、詩篇 90 篇 3 節にある「あなたは人をちりに帰らせて」の「ちり」とは語彙が異なります。詩篇 90 篇の「ちり」は「ダッカー」(**דָּכָא**)で、「人を神に立ち返らせるために、神の前に碎かれる」という積極的・恩寵的な意味合いがあります。同じ「ちり」でも原語を見ると異なっています。人間は土の「ちり」(**אֶפְרָא**)で造られましたが、罪を犯して「いのちの息」を失ったために、死ぬと「土に帰る」ことが定められてしまいました。

【新改訳 2017】創世記 3 章 19 節

あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土の**ちり**(**אֶפְרָא**)だから、土の**ちり**(**אֶפְרָא**)に帰るのだ。」

●しかし人が再びいのちの息を与えられて生きるものとされるためには、神の前に碎かれたちり(**דָּכָא**)とならなければならないのです。

●大地を「**耕す**」人もまだいなかったという表現は、人の務めが大地を「耕す」ことにあることが分かります。エデンの園に置かれた人の務めが 2 章 15 節で「耕すこと」と「守ること」にあることが記されていますので、そこで再度、取り扱いたいと思います。

2. エデンの園に置かれた人と「木と川」とのかかわり

2:8 神である【主】は東の方のエデンに園を設け(=植えた「ナータ」**נָטַע**)、そこにご自分が形造った人を置かれた(**שָׂם**)。

●「**東の方**」(「ミケデム」**מִקְדָּם**)・・多くの聖書が「東の方」と訳している「ケデム」(**קְדָם**)ですが、どこを規点として東の方なのかは明確ではありません。この語彙は「昔」「以前」「前」も意味し、その場合の時の「起点を表わす」前置詞の「ミン」(**מִן**)の省略形で**מ**を接頭語とした用法で「以前からある」

(**דִּקְדָּקָה**)、つまり人を創造される以前からあるとも解釈できます。用例としては、イザヤ書 46 章 10 節の「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を**昔から**告げ」の「昔から」(「ミツケテム」**דִּקְדָּקָה**)がそうです。

●「**エデンに園を**」(「ガン・ベ・エーデン」**גַּן־בְּעֵדֶן**)。「ガン」(**גַּן**)とは「四方で囲まれた庭」という意味。七十人訳は「園」を「パラダイス」と訳しています(エデンの園=**παράδεισον ἐν Ἐδεμ**)。旧約で「エデンの園」という表現は創世記 2 章 8 節の他に、2 章 15 節、3 章 23, 24 節、エゼキエル書 36 章 35 節、ヨエル書 2 章 3 節の 6 回です。特に、エゼキエル書 36 章 35 節では、イスラエルの家がメシア王国においてエデンの園のように回復することが預言されています。

【新改訳 2017】エゼキエル書 36 章 35 節

このとき、人々はこう言うだろう。『あの荒れ果てていた地は**エデンの園**のようになった。廃墟となり、荒れ果て、破壊されていた町々も城壁が築かれ、人が住むようになった』と。

●神は、患難時代において真に悔い改めたイスラエルの民を約束の地(カナン)に住み着かせ、大いに祝福されます。それによって神がアブラハムと結ばれた契約が完全に成就されるのです。イエシュアの到来(初臨)の目的は**イスラエルを滅びた羊のところに**来られ(遣わされ)、天の御国が近づいたことを宣べ伝えることでした。

2:9 神である【主】は、その土地に、見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木(**כָּל־עֵץ**)を、そして、園の中央にいのちの木(**עֵץ הַחַיִּים**)を、また善悪の知識の木を生えさせた。

●見るからに好ましく、食べるのに良いすべての木を、また、園の中央にいのちの木と善悪の知識の木を「**生えさせた**」(「ツァーマハ」**צָמַח**)。人が造られた後、エデンの園に「食べるのに良い」すべての木が芽生えさせられました。「ツァーマハ」(**צָמַח**)は創世記 2 章 5 節では「まだ芽生えていなかった」と否定的に使われていました。「ツァーマハ」(**צָמַח**)が名詞で使われると「若枝」「ツェマハ」(**צֶמַח**)となり、メシアを表わす比喩となります。「すべての木」はメシアなる「食べるのに良い」神のことばそのものです。エデンの園の中で人は神のみことばによって生きていたこととなります。

●「**園の中央に**」と訳されたことばは「**園のど真ん中に**」という意味です。「の中央に」「のど真ん中に」のことをヘブル語で「ベトーフ」(**בְּתוֹךְ**)といいます。「中、間、真ん中」を意味する「ターヴェフ」(**תְּוֵיב**)の連語形「トーフ」(**תוֹף**)に前置詞の「ベ」(**בְּ**)が付いた形です。創世記 1 章 6 節、3 章 3, 8 節も参照の子と。いのちの木が園のど真ん中に位置していたということは、いのちの木にはどの側からでも到達できるということです。シナゴグでは、律法(トラー)の朗読台は会堂中央位置にその座を占めています。それは、トラーの教えがすべての出席者から等距離にあることを示すためだと言われています。

●出エジプト記 25 章 8 節に「彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは**彼らのただ中に**(**בְּתוֹכָם**)住む。」(新改訳 2017)とあります。イスラエルの民が宿営する際、真ん中に幕屋の天幕

(「オーヘル」 אֶהֱל)が設営され、その周囲にはモーセ、およびアロンと三人の息子を始めとするレビ族が宿営します。さらにその周囲に十二部族が、東にユダの陣営(両脇にイッサカル、ゼブルン)、南にルベンの陣営(両脇にシメオン、ガド)、西にエフライムの陣営(両脇にマナセ、ベニヤミン)、北にダンの陣営(ナフタリ、アシエル)が配置されます。中央となる広場は、各陣営によって四方から大きく囲まれています。いのちの木が園のど真ん中に位置していたように、天幕を通してイスラエルの神がイスラエルの民の**ただ中に**住まわれたのです。これもエデンの園の型を真似たものと言えます。

2:10 一つの川(נָחַלの単数)がエデンから湧き出て(צָאֵןの分詞)、園を(אֶת־הַגֶּן)潤していた(הִקְשָׁה)。それは園から分かれ(פָּרַד)て、四つの源流(שָׂרָאの複数רְאשֵׁי)と
なっていた。

●エデンから湧き出る一つの「川」が園を潤していたとあります。「**潤す**」と訳された「シャーカー」(הִקְשָׁה)は 2 章 6 節でも使われています。「シャーカー」は「水を注ぐ、水を飲ませる」の意味にも使われます。これは聖霊を表わす象徴です。エデンは神のみことばと共に無限のいのちの水によって潤され、渴くことがない世界です。イエシュアはサマリヤの女にこう言われました。「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。**わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます。**」(ヨハネ 4:13~14、新改訳 2017)と。まさにこれはエデンの園の回復を意味しています。

●**エデンから湧き出る川**は四つの川となって分かれ出ました。四つの川の「源流」は複数形で「ローシム」(רְאשֵׁי)となっています。「源流」の原義は「ローシュ」(רֵאשִׁית)で「頭」を意味します。まさに人の内で泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ることイメージさせます。聖書では「**四**」は「すべて」「すべての面において」「全世界」を意味する数です。そして「**分かれる**」と訳された「パーラド」(פָּרַד)は、地上の諸民族が洪水後にノアの三人の息子から「分かれ出た」というところでも使われています(創世記 10:32)。また神の計画を担う民の本流と支流を分ける意味でも使われています(創世記 13:9)。

●と同時に、神のご計画においては、「**離散した全イスラエル**」が最終的に全世界の四方から集められて、神の都エルサレムに連れ戻されます。それはすでにエゼキエルが預言している通りです。

【新改訳 2017】エゼキエル書 37 章 21 節

彼らに告げよ。『【神】である主はこう言われる。見よ。わたしはイスラエルの子らを、彼らが行っていた国々の間から取り、**四方から集めて**彼らの地(=エルサレム)に導いて行く。』

●「**川**」の原語は「ナーハール」(נָחַל)です。エデンの園にある源泉としての「一つの川」は、園の全体を潤すために四つの支流となって流れ出ます。そして、その後「一つの川」は、ヨハネの黙示録 22 章 1 節によると、「新しい天と新しい地」においては、御座から流れ出るいのちの水の「川」となり、川の両岸にはいのちの木があり、12 種の実をならせ、その葉は諸国の民をいやす(=元気づける)とあります。ここに、「エデンの園」と「聖なる都である新しいエルサレム」とが整合性を持っていることも分かります。

2:11 第一のものの名はピション。それはハビラの全土を巡って流れていた。
そこには金があった。

●ここには主動詞はなく、「**巡って流れていた**」と訳された冠詞付きの分詞「ハッソーヴェーヴ」(בַּחֲסֹוֹ)があるだけ。第二の川である 13 節も同じく「クシュの全土を**巡って流れていた**」とあります。動詞の「サーヴァヴ」(סָוַו)は、イエシュアがガリラヤの全域を「巡って」に使われています。そのようにして、ガリラヤ全土にくまなくイエシュアが御国の福音を宣べ伝えられたのは、エデンから流れる地には「良質の金や宝石(=「ショハム石」とは「縞めのう」のこと)があった」ように、御国には何にもかえがたい尊い宝があることを教えるためだったと考えられます。

2:12 その地の金は良質で、そこにはベドラハとショハム石もあった。

2:13 第二の川の名はギホン。それはクシュの全土を巡って流れていた。

2:14 第三の川の名はティグリス。それはアッシルの東を流れていた。

第四の川、それはユーフラテスである。

●さらに、14 節の第三の川の「**流れていた**」は冠詞付きの分詞「ハホーレーフ」(הֹלֵף)が使われています。これは動詞の「歩く」を意味する「ハーラフ」(הָלַף)が語幹となっていますが、おもむくままに歩いて(=流れて)いるのではなく、神のご計画とみこころにそって流れていることを指し示しています。イエシュアも同様、御父のご計画とみこころに従って歩まれていました。十字架の道さえもそうです。「ハーラフ」(הָלַף)は神の前における人のすべての行為を要約する統括用語と言えますが、イエシュアがその模範を示した最後のアダムとなりました。第四の川には「流れていた」という語彙はありませんが、これはヘブル的修辞法の一つで、省略していると考えられます。この第四の川の流れ行くところから、アブラハムが神に召し出されているのです。

●「エデンの園」にある「すべての木」(食物としての実がなる木)と「源泉としての一つの川」は、いずれも「神のことば」であるイエシュアを象徴するものです。また、「一つの川」は、やがて終末におけるメシア王国においてエルサレムの神殿から流れ出る豊かないのちの水をも象徴しています。

●やがて訪れるメシア王国(千年王国)では「渇き」がありません。なぜなら、生ける「水」と「その流れ」が豊かにあるからです。新天新地における「聖なる都」、「新しいエルサレム」にも、神と子羊との御座から流れ出る「水晶のように光るいのちの水の川」があるのです(ヨハネの黙示録 22:1)。その「いのちの水の川」とは御霊ご自身とも言えます。その「水」を飲むことのできる人は幸いです。それゆえ、「ああ、渇いている者はみな、水を求めて出て来い。」(イザヤ 55:1)と呼びかけられているのです。「水」はヨハネの福音書において重要なテーマとなっています。「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」(ヨハネ 7:38)とイエシュアは言われました。「聖書が言っているとおり」とあるように、この祝福はすでに旧約で何度も繰り返して語られていたことなのです。

(1) 詩篇 46 篇 4～5 節【新改訳 2017】

4 川がある。その豊かな流れは神の都を喜ばせる。いと高き方のおられるその聖なる所を。

5 神はそのただ中におられその都は揺るがない。神は朝明けまでにこれを助けられる。

(2) エゼキエル書 47 章 1, 9 節【新改訳 2017】

1 彼は私を神殿の入り口に連れ戻した。見ると、水が神殿の敷居の下から東の方へと流れ出ていた。神殿が東に向いていたからである。その水は祭壇の南、神殿の右側の下から流れていた。

9 この川が流れて行くどこでも、そこに群がるあらゆる生物は生き、非常に多くの魚がいるようになる。この水が入ると、その水が良くなるからである。この川が入るところでは、すべてのものが生きる。

(3) ゼカリヤ書 14 章 8 節【新改訳 2017】

その日には、エルサレムからいのちの水が流れ出る。その半分は東の海に、残りの半分は西の海に向かい、夏にも冬にも、それは流れる。

3. エデンの園における人間の務め(「耕すこと」と「守ること」)

2:15 神である【主】は人を連れて来て(לָקַח)、エデンの園に置き(נָוַח)、そこを耕させ(עָבַר)、また守らせた(שָׁמַר)。

●主要動詞は、神が人をエデンの園に「連れて来て」、「置いた」のです。「エデン」とは「楽しみと美味しさの豊かなところ」「贅沢きわまりないところ」という意味ですが、神はそこに人を連れて来て置いたのです。「置いた」と訳された動詞は「ヌーアツハ」(נָוַח)で、「安息を与える、憩わせる」という意味もあります。何のために置いたのかと言えば、ヘブル語原文では「そこを耕すために」、また「そこを守るために」とあります。

(1) 「耕す」とは

●どの木からでも思いのまま食べてよいと言われたエデンの園で、なにゆえに人は「耕す」必要があったのでしょうか。それは、「耕す」とは**祭司用語**で、神から与えられたすばらしいものを味わい、その喜びを見出す務めです。エデンの園にある安息を十分に楽しむためであると考えられます。ヘブル語の「ヌーアツハ」(נָוַח)は、イエシュアのことばの約束にもあります。それはマタイの 11 章 28 節で「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(新改訳 2017)の「休ませてあげます」が「ヌーアツハ」です。

●「ヌーアツハ」の名詞「メヌーハー」(מְנוּחָה)は「憩い」「安息」を意味します。「主は私の羊飼い。私は乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。」という詩篇 23 篇の「いこいの水のほとり」の「憩い」、これが「メヌーハー」です。つまり、主が私をそこ(憩い、安息)へと伴われるのです。主との深い親密な交わり、かかわりが私たちに安息をもたらすのです。エデンの園はそうした安息のある場所だったのです。神の与える安息を味わい、そのすばらしさを楽しむ

という務めが「耕す」という言葉に込められています。

(2) 「守る」とは

●しかしもう一つ、「**守る**」という務めがあります。それはいわば**王的務め**です。「エデンの園」を治め、管理するという務めです。なにゆえこの務めが必要なのでしょう。最初の人アダムはこの務めについてよく分からなかったのではないかと思います。神が光と闇を区別されたように、エデンの園を光の園として管理し、闇の支配から区別することです。その証拠に、17 節で「善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ。」と言われました。つまり、食べてよい木と食べてはならない木を区別するように言われたのです。これは、神である主が光と闇があることを予め人に教えているということです。エデンにある良いものを存分に楽しむことができますが、闇の支配があること、そのためにその支配に陥らないように、人は次の神の声に聞き従わなければならなかったのです。

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べる時、あなたは必ず死ぬ。」

●後に、神は人類の救いの担い手となるべく選ばれたイスラエルの父祖、アブラハムに対して次のように言われました。

【新改訳2017】創世記22章18節

あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。**あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。**

●創世記 22 章と言えば、アブラハムの信仰生涯において最大の試練となった出来事を記す箇所です。その試練に勝利したアブラハムに対して神が語ったことばは、「**あなたが、わたしの声に聞き従ったからである。**」でした。神の声に聞き従うということは、どんな犠牲いけにえにも勝ることなのです。しかしアブラハムの子孫であるイスラエルの民はそのことに失敗しました。そこで神の御子イエシュアが遣わされました。御子イエシュアのしたことはまさにこの「御父の声に聞き従うこと」だったのです。イエシュアはアダムアダムの失敗を、イスラエルの民の失敗を踏み直すために、第二のアダムとして、また真のイスラエルとして「エデンの園を回復する」ために来られたのでした。

●アダムに与えられた「祭司的務め」と「王的務め」は、教会に対しても、またイスラエルに対しても、「祭司の王国」(出エジプト記 19:6)、「王である祭司」(Iペテロ 2:9)、「王国とし、祭司としてくださった」(黙示 1:6)として継承されています。

4. ふさわしい助け手との一体

- 2:18 また、神である【主】は言われた。「人がひとりでいるのは良くない。
わたしは人のために、ふさわしい助け手 (עֲזָרָה קְנֻגָדוֹ) を造ろう。」
.....
- 2:20 人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた (קָרָא)。
しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。
- 2:21 神である【主】は、深い眠りを人に下された。それで、人は眠った。
主は彼のあばら骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた。
- 2:22 神である【主】は、人から取ったあばら骨を一人の女に造り上げ (בָּנָה)、
人のところに連れて来られた。
- 2:23 人は言った。「これこそ、ついに (=「今度こそ」 הַפְּעָם) 私の骨からの骨 (עֲצָם)、
私の肉からの肉 (בָּשָׂר) を。これを女と名づけよう (קָרָא)。男から取られたのだから。」
- 2:24 それゆえ、男は父と母を離れ (עָזַב)、その妻と結ばれ (קָבַע)、ふたりは一体
(בָּשָׂר אֶחָד) となるのである。
- 2:25 そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。

●何故、神である主は「人がひとりでいるのは良くない」と言われたのでしょうか。「人はすべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけた。」ということは、人が彼らを支配するものであったことを意味します。「しかし、アダムには、ふさわしい助け手が見つからなかった。」というのが、「人がひとりでいるのは良くない」と言われた理由です。しかし、人がひとりでいるのは良くないことの原因はもっと深いところにあります。エデンの園は天にあるものの写しであり、天におられる神は永遠に交わりの存在です。それゆえに、アダムには神の交わりを映し出す「ふさわしい助け手」が必要とされたのです。

●「**ふさわしい助け手**」のことを「エーゼル・ケネグドー」(עֲזָרָה קְנֻגָדוֹ)と言います。「エーゼル」とは「助け手」を意味し、「ケネグドー」(קְנֻגָדוֹ)の「ネグド」(נִגְדָה)は「向かい合う」ことを意味し、前置詞の「ケ」(כִּי)は「~のような、~として」の意で、「彼と向かい合う者としての助け手」となります。つまり神はアダムのために彼の最も必要な助け手として、もう一人の人(女)を造られたのです。ここの「造られた」と訳された動詞は、本来「建て上げる」という意味の「バーナー」(בָּנָה)が使われています。そしてこの語彙の中に、実は神の御子を意味する「ベーン」(בֵּן)が隠されていることを悟らなければなりません。教会はキリストの花嫁であり、その花嫁を建て上げるのは花婿なるキリストであるというメッセージが隠されているのです。

●このことは奥義です。使徒パウロは「夫と妻」の結婚を「神と人」との交わりの奥義として理解しました。「これを女と名づけよう。男から取られたのだから。」という意味はヘブル語で見ないと理解できません。創世記 1 章では男は「ザーハール」(זָכָר)、女は「ネケーヴァー」(נְקֵבָה)でそのつながりがありますが、創世記 2 章の「男」は「イーシュ」(אִישׁ)、「女」は「イツシャー」(אִשָּׁה)で、本質的に一つの存在から造られていることを表わす語呂合わせとなっているのです。

●「それゆえ、男は父母を離れ、その妻と結ばれ」とありますが、「**離れ**」は「捨てる、見捨てる」という強い意味の動詞「アーザヴ」(עָזַב)です。それは妻と「**結ばれる**」(「ダーヴァク」קָבַע)のためにはな

くてはならないです。この動詞を調べてみると、①結びつく、縁を結ぶ ②すぎる、堅くすぎる ③まといつく ④くつつく、くつついて離れない ⑤心が惹かれる ⑥そばにいる、そばから離れない ⑦へばりつく、打ち伏す ⑧追いつく、追い迫る、押し迫る ⑨堅く守る・・・このように「ダーヴァク」(דָּבַק)は、神と人、および人と人とのかかわりがきわめて親密であることをうかがわせる動詞です。ちなみに、嫁のルツが姑ナオミに「すがりついた」ことが、神のご計画においていかにすばらしい結果をもたらしたか、それは圧巻です。

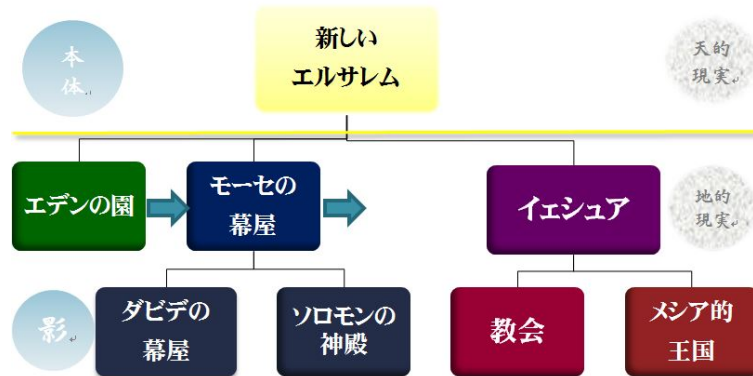
●また、男と女は「**一体**」となるように神に造られました。「**一体**」と訳された「**一**」の「エハーッド」(אֶחָד)は、神ご自身(三位一体)の本質を表わすきわめて重要な概念です。同様に、神と人との関係において、夫婦の関係において、ユダヤ人と異邦人との関係において、またイスラエルと教会との関係において、そして神の子どもたちと被造物との関係においても、神ご自身の「三位一体性」が土台となっています。地にあるすべてのかかわりは、すべて天の写しとなっているのです。そしてエデンの園においてはその原初的写しが啓示されているのです。

●次に 24 節の「**一体**」と訳された「バーサール・エハーッド」(בָּרְסָרְ אֶחָד)にある「**体**」も重要です。それは、有機的、親密なかかわりを表わす概念です。この「バーサール」(בָּרְסָר)こそ、神と人、夫と妻、かしらとからだ、花婿(キリスト)と花嫁(教会)という結婚の一体性の概念を啓示するものです。からだの存在なしに夫婦の愛が成立しないように、からだの存在なくして神と人とが共に住むという御国を完成させることはできないのです。また、かしらなるキリストはからだなる教会の存在なしに何をすることもできないのです。このように、からだは永遠の愛のかかわりを実現させるためになくてはならないものなのです。それゆえに、イエシュアが死からよみがえり、信じる者にからだのよみがえりを約束しておられることは究極的な福音となるのです。

●イエシュアが受肉されたその秘義は、キリストのからだから流れる出る血潮によって「バーサール」(בָּרְסָר)が贖われるだけでなく、むしろ、復活(よみがえり)のいのちによって新しくされた「バーサール」によって、永遠に神と人とが共に住むことが実現するということです。これこそが、天と地の創造がなされる前に神があらかじめもっておられたご計画であり、エデンの園の回復なのです。その意味において、今回の「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。」というのは、御国を実現する上で、必要不可欠なことであったのです。

●イエシュアが「御国の福音」を宣べ伝えた時に、多くの病める者たちが癒されました。また死んだ者(イエシュアはこれを「眠っている」と表現します)が生き返る奇蹟をなされました。これは決してイエシュア自身に人々の注目を集めるための一時的な手段ではなく、むしろ、永遠の御国の本質を現わすデモンストレーションであったのです。それゆえ、ヘブル語の「からだ」を意味する名詞「バーサール」(בָּרְסָר)の動詞「バーサル」(בָּרַס)のピエル態(強意形)が「良い知らせを告げ知らせる」という意味を持っていることは、特筆すべきことなのです。それゆえ、「からだ」に関する倫理のすべては、この根源的な事柄から理解される必要があるのです。

ベアハリート



●神が人とともに住む家として設けてくださったのは「エデンの園」(=パラダイス)です。歴史的にはそれが「幕屋」「神殿」「教会」「メシア王国」(御国)、そして「新しいエルサレム」と変遷していきますが、それらはすべて「エデンの園」にあったものの言い換えです。まさに預言者イザヤが神に代って語ったように、「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる』と言う」とあるとおりなのです(イザヤ書 46:10)。エデンを再度見直すことで、そこに神のご計画の全貌を悟ることができるようになりますと信じます。なぜなら、神のご計画の究極の目的は「エデンの回復」に尽きるからです。旧約聖書と新約聖書は別のものではなく、神のはかりごとは本来一つにつながっているという読み方をこれからもしていきたいと思えます。

2018.9.24

第 15 回 ヘブル・ミドゥラーシュ例会
空知太栄光キリスト教会牧師: 銘形 秀則